

August 16, 2026

信仰の逆説

マルコ 9:21-24

9:21 イエスは父親にお尋ねになった。「この子にこのようなことが起こるようになってから、どのくらいたちますか。」父親は答えた。「幼い時からです。」

9:22 霊は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。しかし、おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください。」

9:23 イエスは言われた。「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」

9:24 するとすぐに、その子の父親は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

スポーツではよく逆転劇が起こります。ベースボールのメジャーリーグ（MLB）では7回の優勝決定戦が行われ、先に4回勝ったほうが優勝します。2004年のアメリカン・リーグで、ボストン・レッドソックスとニューヨーク・ヤンキースとが優勝決定戦に臨みました。レッドソックスは初戦から3連敗。もうだめかと思われたのですが、そのあと4連勝して優勝しました。これは「レッドソックスの奇跡」と呼ばれ、MLB 史上唯一のことだそうですが、聖書にはこうした「逆転劇」が数多く記されています。

母マリアはこう歌いました。「主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。」（ルカ 1:51-53）世の中で富や権力のある

者がどんなに栄えていても、神はへりくだる者を高く上げ、貧しい者を富ませ、彼らを救ってくださるとの逆転の預言です。イエスは、この預言の成就をこう宣言されました。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。」（マタイ 5:3-5）これはまさに「逆転の宣言」です。

一、逆転の救い

聖書の救いは「逆転の救い」です。そして、その「逆転の救い」は神から始まりました。神は聖なる方、私たち人間をはるかに超えたお方です。なのに、神は人の世界に降りてきて、人とともに住まわれると言われました。イザヤ 57:15 にこうある通りです。「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名が聖である方が、こう仰せられる。『わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。へりくだった人たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである。』」

実際、神は人となって世に来られました。それは神が世を愛されたからです。神は私たちには「あなたがたは世も世にあるものも、愛してはいけません」（ヨハネ第一 2:15）と言っておられるのに、そんな世を愛して御子イエスを遣わしてくださいました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ 3:16）とある通りです。

そればかりではなく、何の罪もないイエスが私たちの罪を背

負って罪ある者となり、十字架の上で死なれました。それは私たちの罪を赦し、神に受け入れられる者とし、神の前で生かすためでした。聖書にこうあります。「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。」（コリント第二 5:21）

これは神の愛による「逆転」です。ところが人々は自分たちの救い主を斥け、聖く正しいお方を十字架にかけ死に追いやりました。これは、人間の罪が神の愛をひっくり返した恐ろしい「逆転」です。しかし、神はそれをもう一度ひっくり返されました。神はイエスをよみがえらせ、ご自分の愛を斥けた者さえも悔い改めに導いてその罪を赦し、受け入れ、再び生かして下さったのです。これが復活の「大逆転」です。ペテロはこう言いました。「あなたがたは、この聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、いのちの君を殺したのです。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」（使徒 3:14-15）私たちは十字架と復活による逆転の救いによって救われています。

二、信仰の逆説

世界にはどこにでも、戒め、慣習、儀式があつて、どの国の人々、民族もそれらを守り行うことによって人は救われると考えられてきました。とくにユダヤの人々は、正しく生きるとは「律法」を守り行うことだと堅く信じていました。聖書には神だけを礼拝すること、偶像を作ってはならないこと、安息日を守ることなどが命じられており、ユダヤの人々には食べてよいものと食べてはいけないものなどの決まりも与えられていました。ユダヤの人々は聖書に書かれているものよりも事細かな規

則を数多く作り、それを神の言葉に加え、それを「律法」と呼びました。この「律法」を守ることによって救われようとしたのです。

「律法」に熱心な人たちは、自分たちは「律法」を守っていると自慢し、「律法」を持たないユダヤ人以外の人々や、ユダヤ人であっても、あまり学問のない民衆を「律法を知らない者」と言って軽蔑しました。イエスに対してさえ、「律法を守っていない」といって非難しました。それはイエスが安息日に病気の人を癒やされたからでしたが、彼らがそんなふうに非難するのは律法を本当の意味で知らず、守っていないからだったのです。彼らは人間が作った規則を表面的に守っているだけで、神が聖書で教え、人に求めておられる一番大切なことをないがしろにしていたのです。

イエスは「律法」に対して「信仰」を教えられました。それは当時のユダヤの人々には「逆転」の教えでした。イエスの最初の弟子になったのは、「律法を知らない」と言われていたガリラヤの漁師たちでした。次に弟子になったのは、ユダヤ人の誇りを捨てローマの手先となって働いていた取税人たちでした。この人たちは皆、信仰によってイエスに従ったのです。律法によってではありません。イエスは「罪深い女」と呼ばれた女性に赦しを与えました。出血性の病気のため律法では「汚れた者」とされていた女性を癒やしました。ツアラアトに冒されたサマリア人を清め、エリコの町の目の見えない人の目を開かれました。そして、こうした人のすべてに、「あなたの信仰があなたを救いました」（ルカ 7:50、8:48、17:19、18:42）と言われました。人を救うのは「律法」の行いではなく、イエスを信じる「信仰」であることをはっきりと教えられたのです。で

すからイエスはなによりも人々の信仰を喜び、不信仰を悲しまれました。

きょうの箇所にはイエスが「変貌の山」から戻ってこられたときのことが書かれています。イエスがペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人を連れて山におられたとき、一人の父親が悪霊に憑かれた息子を連れてきて、悪霊を追い出してほしいと弟子たちに願いました。弟子たちは悪霊を追い出そうとしましたができませんでした。そのうちそこに人だかりができ、律法学者たちが弟子たちを責めはじめ、議論になっていました。そこでは、この気の毒な息子のことも、息子を連れてきた父親のこともそっちのけになっていたのです。

それをご覧になったイエスは言われました。「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。」（マルコ 9:19）イエスは、群衆の不信仰ばかりでなく、ご自分の弟子たちの不信仰をも嘆かれたのです。

イエスは父親を呼んで、「この子にこのようなことが起こるようになってから、どのくらいたちますか」と尋ね、人々の関心を不毛な議論から、子どもの癒やしへと向けられました。父親は答えました。「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。しかし、おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください。」父親は「おできになるなら」と言いましたが、イエスはそこにご自分に対する絶対の信頼が欠けているを感じ取られました。父親は弟子たちが息子を救えなかったことで、イエスへの信頼も揺らいでいたのです。イエスは父親に、「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです」と言

われました。これは叱責の言葉であると同時に、父親から信仰を引き出すための言葉でもありました。父親は即座に答えました。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

「信じます。不信仰な私をお助けください。」この言葉には、信仰の逆説があります。本当の信仰とは、自分の不信仰を知ることだという逆説です。自分の不信仰が分かる人が信仰を持つことができるということです。私たちは、「律法」の行いによってではなく、「信仰」によって救われることを知っています。「律法」を誇っている人たちに対して「信仰」を誇ります。しかし、もし、自分の信仰が純粹だから、立派だから、成長しているから、自分の信仰深さによって救われていると考えるとしたら、それは「律法主義」の人が「律法」と「律法」の行いを誇るのと変わらないものになってしまいます。たしかに救われるには信仰が必要です。しかし、人はその「信仰深さ」で救われるものではありません。人を救うのは神の愛、キリストの恵み、聖霊の力であって、信仰は救いを受け取る手なのです。「あなたの信仰があなたを救った」というのは、「あなたは信仰によって救いを受け取った」という意味なのです。

人の「信仰」も、神の「真実」も聖書のギリシャ語では同じ言葉、「ピステイス」で言い表されています。ですから「信仰」を「真実」と読み代えることができます。つまり、「信仰」とは、神の「真実」に対する人間の「真実」を指すのです。神の「真実」にくらべれば、人間の「真実」などちっぽけなものです。それは「信仰」とは呼べないもの、「不信仰」でしかないかもしれません。しかし、イエスはたとえ私たちの「真実」が欠けのあるものであっても、私たちの精一杯の真実を「信仰」と認め、私たちの「不信仰」を「信仰」へと変えて

くださるのです。「私は不信仰な者ですから……」と言って、イエスを受け入れ、イエスに信頼し、従わないことの言い訳けにする人がいますが、そんな言い訳けは成り立ちません。私たちにはイエスの救いが、助けが、癒やしが必要です。この父親のように、「信じます。信じきれず、疑いを持ち、あやふやな私、不信仰な私をお助けください」とイエスに申し上げます。そのとき、不信仰が信仰に変えられ、私たちは信仰の逆説を体験し、逆転の救いを主から受け取ることができるのです。

（祈り）

父なる神さま、あなたの大きな真実の前に、私たちの真実はあるかないかわからないほどのものです。しかし、あなたは、そんな私たちの真実をも「あなたの信仰」と呼んで受け入れてくださいました。私たちは、自分たちの「不信仰」を認め、あなたに「信仰」を求めます。なによりも「信仰」を喜ばれるあなたに喜んでいただき、私たちも「信仰」の賜物を喜ぶ日々を、この週もお与えください。イエス・キリストのお名前です。